美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2016 November/December

TAKE FREE

NO.38

特集

庄内「秋」写真季行

庄内憧憬

芳賀徹 比較文学者

Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2016 November/December

平成28年11月1日発行（隔月奇数月発行）第7巻2号（通巻38号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／大山公園展望台

柔らかな陽射し　出羽を包む

荘内銀行

「希望」よりも「郷愁」こそ
―追憶の庄内

芳賀 徹

城下町鶴岡の学問好きの気風、そして品格の高さはいまも深く心に残る。

私は昭和十年（一九三五）の春、山形市の母かたの祖父母の家から鶴岡に引越した。もう八十年余り前の遠い遠い昔のことである。山形生まれの私はそのとき満四歳。だからほとんど何もおぼえていない。ただ、新庄駅で奥羽線から陸羽西線に乗換えるとき、ねえやのつたちゃんが風呂敷包みで抱えていたわが家の柱時計が、にわかに不規則に鳴りだしたのが、妙に印象に残っている。まだ若かった父親が駅のホームの立ち喰いそば屋に入って、汽車の発車間際になっても戻らず、車窓からしきりに父を呼んだことなども。

父はその春はじめて県立鶴岡中学校の歴史教師になったばかりだった。東京の高等師範学校卒業の直前に、左翼の「新興教育」運動に加わって警察に捕まり、直ちに退学を命ぜられた。その後四年かけて転向し、やっと得た就職口だった。母も鶴岡の小学校の先生になって、はじめて一家まとまっての平穏な生活だったからか、家中新町の借家暮しは楽しかった。実になつかしい。すぐ隣の大家さんの門前の大銀杏は秋になると表通りにまで実を降らせ、私たちには拾いきれなかった。冬、地吹雪の吹きめぐる中を私と二歳下の妹は小さなスキーをはいて薄暗くなるまで遊び呆けた。父母も勤めから帰って、私が家に入ろうとすると、玄関前の雪が凍てついていて、私は滑り、左手の人差し指をガラス戸に突っこんだ。その傷あとはいまも指先に残っている。

庄内浜の魚売りのおばさんが籠をかついでわが家にもよくやってきた。「ボッケハン」と「メッチャハン」にと、いつも小鯛などをおまけにくれた。それを焼いて飯盆のごはんにのせ、つたちゃんに連れられてすぐ近い公園地の花盛りに遊びにゆくのも、私たちのたのしみだった。つたちゃんはあの頃、仕事しながらいつも「スミレ買イマショ、アノ花売リノ、可愛イ瞳ニ、春ノユメ…」を歌い、私もいつのまにかこの流行歌を歌っていた。南京陥落を祝う提灯行列が、父の学校の生徒たちを含めて、家中新町の暗い表通りを行ったのも、同じ頃だったろう。

やがてわが一家は鷹匠町に引越した。理由は知らない。旧藩主の重臣だったという酒井さんの古いお屋敷の奥二間を間借りしたのである。庭には牡丹も芍薬もたくさん咲いた。おばあさんは屋敷の庄内柿を自分でもいで、どっさり分けてくださった。同名の坊や徹さんは最良の遊び友達となって、いまもおつきあいがある。昭和十三年春、私は小学生となって、畑と田んぼの向こうの朝暘第三小学校に通った。佐藤誠孝先生が担任で、前鶴岡市長の富塚陽一さんは同級か同期生だったという。「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」のピンクの挿絵がなつかしい。父は同じ春、東京に戻って文理科大学の史学科学生となり、私と妹は秋から山形の祖父母のもとに預けられ、女子師範付属小学校に転校した。わずか三年半ののどかな鶴岡暮しだった。

だが殿様在住の城下町鶴岡の学問好きの気風、そして品格の高さはいまも深く私の心に残る。月山と日本海に守られたあの地の人々の歴史と風土は、いまもなお私たちに、人は浅はかな「希望」などよりも「郷愁」によってこそ豊かに生きる、と教えつづけてくれている。

鶴岡市 旧鷹匠町界隈

はが・とおる／1931年山形市生まれ。東京大学教養学部教養学科卒。同大学院比較文学比較文化博士課程修了。文学博士。パリ大学、プリンストン大学留学。東京大学、国際日本文化研究センター教授、京都造形芸術大学学長などを経て、現在、静岡県立美術館館長。著書『平賀源内』（1982年サントリー学芸賞）、『絵画の領分』（1984年大佛次郎賞）、『藝術の国日本・画文交響』（2010年蓮如賞）他多数。

庄内柿の畑と白く輝く鳥海山。庄内柿は庄内地方の秋の風物詩だが、近年は放置畑の増加が課題となっている。この柿畑もその一つ。撮影場所は遊佐町の山間地にて。
写真＝八尾坂弘喜

特集
Special Edition

庄内「秋」写真季行

空高くなる秋。庄内平野では、稲刈りを終えた田んぼに白鳥たちが訪れ、じき訪れる厳しい季節を前に冬の準備を整えます。山麓、里山、平野、川、海…。それぞれの分野で活躍する写真家5人の眼を通して、庄内の秋を旅してみました。

佐藤 要さん

鳥海の秋は草紅葉 つかの間の平穏

秋晴れの日は千畳ヶ原へ。
池塘に映える高い空は、すでに
冬の気配を含んでいました。

昭和24年、北海道生まれ。平成9年創刊『山歩きの雑記帳』の編集発行人。文章を主に写真やイラストで構成。東北の山の魅力をつづった記録は通巻31号を数える。

「鳥海山」は高さと端麗な姿から東北一の名山といわれています。「巨大な火山であり、海岸から2千メートルを超えて立ち上がる山は全国に例を見ません。山麓から中腹、山頂まで、季節を変えて多彩な景観を見せてくれます。紅葉は9月中頃に始まり、下におりてくるのは10月下旬。それだけ大きい山が身近にあるのは幸せなことです」。佐藤要さんと鳥海山との出会いは中学校の学校登山。初登頂にして御来光と影鳥海、ブロッケン現象を一度に目にして以来、山に魅せられ、各地の山々を歩いてきました。

社会人になってからも時間を見つけては山へ向かい、「人並みにクライマーを目指しましたが、滑落などアクシデントがあり、垂直の世界は向かないとあきらめました。山の写真を始めたのはその頃です」。その後、フリーカメラマンとして商業写真の撮影を開始。多忙を極め、山から遠ざかった日々を過ごしていましたが、仕事が少し落ち着いた頃、再び山に向かうようになります。

山の写真を撮るようになって単独行が増えたという佐藤さん。しかし本心には「人」、登山者を撮りたいという思いがありました。「山の美しい風景は、登山者の目に映ることで初めて意味を持つものと思います。その時の心の動きや、そこにたどり着くための登山活動を文と写真や絵で表したい、それを形にしたのが『山歩きの雑記帳』です。また、鳥海山の登山道を網羅したガイドブック『鳥海山を登る』を発行しました」。

このガイドブックは、山の隅々にまで目を向けた、鳥海山を目指す人のための実用書です。山のなりたちをふまえ、地形や植生などを詳細に伝えています。「鳥海山にはルートを変えながら何度も登っています。同じ山にいてもいつも表情が違うこと、それが山の姿であり魅力です」。

佐藤さんが鳥海山を歩いて撮り続けているテーマの一つが、真冬の山頂の〝エビのしっぽ〟、岩氷です。撮りたいものははまだ多くあると話します。「人生の半ばを越えて、残されている時間はやっぱり自分の一番好きな山で時間を費やしたい。百名山じゃなく一名山でいい。登るたびに新たな喜びをくれる、そういう意味でも私にとって鳥海山は大きいですね」。

（上）千畳ヶ原は、豊富な雪解け水により溶岩台地の上にできた湿原。草紅葉の草原が美しい。（右下）分厚い溶岩の層をあらわにする七高山。新山との間に万年雪が残る。（左下）二ノ滝道の上部、月山沢徒渉点の清流。雨天時は増水で渡れないことも。

佐々木 吉治さん
心躍る一瞬を追い求めて

ふと撮影した白鳥の写真に魅せられて37年。撮り続けるほどに、新たな意欲が湧いてくるんです。

昭和24年、遊佐町生まれ。30歳の時、酒田に飛来した白鳥の撮影を機に、庄内の祭事や山居倉庫などを精力的に撮影。NHKワールドカレンダーフォトコンテスト金賞ほか多数の受賞歴を持つ。

「卵がふ化し、子白鳥の姿を捉えた時は、緊張と感動でカメラを持つ手が震えるほどでした」と感慨深げにその時の様子を話してくださったのは、アマチュア写真家の佐々木吉治さんです。今から10年前、土門拳記念館で子白鳥誕生の瞬間をカメラにおさめることに成功した佐々木さんは、37年来、酒田に飛来する白鳥を撮り続けてきました。「長年、撮影を続けてこられたのは、その優雅さのみならず、格闘や飛翔の躍動感、夫婦や親子の絆が感じられる姿を見せてくれる、白鳥という生命体そのものに魅かれていたからでしょうね」。実は、佐々木さんがカメラマン人生を歩む転機となったのも、友人のカメラで何気なく撮影した白鳥の写真だったのだとか。酒田に白鳥が飛来すると聞けば、導かれるように最上川スワンパークへ通い詰めたという佐々木さん。「シャッターチャンスを逃すまいと、朝から晩までファインダーをのぞいていましたね」。観察と撮影を続ける中で白鳥の生態を学び、撮影技術も試行錯誤を繰り返しながら独学で習得したそうです。

元来、活動的で多趣味な佐々木さんは、ゴルフやスキーなどのフォームをチェックするために動画撮影をしていましたが、「動画だと流れていってしまう一瞬を、写真でなら切り取ることができる。それが面白くて、こんな瞬間を撮ってみたいというアイデアが次々と湧き起こってくるんです」。

白鳥と同様、佐々木さんがライフワークとして続けているのが、庄内地域で行われている祭事の撮影です。「忘れたくない記憶、受け継ぐべき伝統だからこそ、美しさが感じられる写真として残しておきたい」と、背景や前景にも気を配り、季節感漂う、情景的で魅力ある一枚に仕上げています。

すっかり写真の虜になってしまったと笑う佐々木さんは、撮影のためならどんなことも苦にならないと言います。撮影場所には幾度も足を運び、季節や天候、時間を考慮しながらさまざまな撮影方法を試みるなど、その意欲は尽きることがありません。「未だ満足できる写真が撮れていないから、また撮影したいという気持ちになる。まだ誰も見たことのない一瞬を探し続けていきたいですね」。

取材・文＝土門かおり

（上）色鮮やかな紅葉を背に飛来する白鳥一家。（左下）巣立つ子に飛び方を教える白鳥の親鳥。水面に差し込む朝日の輝きが躍動感を増す。（右下）晩秋に雪が薄く降った山居倉庫。澄んだ空に紅葉と白雪のコントラストが美しい。

高橋 政知さん

目には映らない「いい顔」を撮る

庄内の豊かな自然の誰も見たことがない表情に出合うために。

昭和30年、鶴岡市生まれ。県立鶴岡工業高校卒業後、東京写真大学（現東京工芸大学）に進学。35歳で鶴岡に戻り「プラネット写真事務所」を設立。被写体やフィールドを問わずさまざまな写真を撮影する。

風景や人物、建築、料理にいたるまで、さまざまな被写体を撮り続ける広告写真家、高橋政知さん。仕事以外の場でもライフワークとなる写真を撮り続けてきました。「カメラをデジタルへ切り替えていろいろと試行錯誤していた平成18年頃、フィルムでは表現できないことを、と思っていた時に撮れたこの写真が、水面シリーズのきっかけになりました」。

やわらかに波打つ緑の上に秋色の葉が1枚。鳥海山の麓で、牛渡川を流れる落ち葉を撮った写真です。

「水の揺らぎを瞬間的に捉えられたのは、デジタルになって、表現できるシャッタースピードの限界値が上がったからです。フィルムではここまで繊細な表情は出せなかったし、もちろん肉眼で見える世界ではない。これはおもしろいと思いました」。

もう一枚は、闇夜で光る大樹のライトアップシリーズ。「これは逆に、シャッタースピードを遅くしてフィルムで撮りました。シャッターが開いている間にライトで木を照らすんです。感覚としては、暗闇に絵を描いていく感じかな」。

誰もが見慣れているはずの自然を、誰も見たことがないように写す高橋さんの写真。その根幹には、ある写真家の言葉がありました。「写真は肉眼を越える」。酒田出身の写真家、土門拳さんの言葉です。「高校2年の秋に、酒田の清水屋で『古寺巡礼』を観たんです。実物よりもビシッと写っている仏像の数々に圧倒されたのはもちろん、何より図録にあったこの言葉が衝撃的でした。写真の道を志したのは、まさにこの時でしたね」。

その後、東京の大学に進学し、一時もカメラを離さない写真漬けの生活を送った高橋さん。卒業後はキヤノンの宣伝部カメラマンとして14年間国内外を飛び回りました。「今までいろんな景色を見てきましたが、庄内の自然が世界の絶景に勝るかと言われれば、必ずしもそうではないと思います」と高橋さん。「でもね、少し視点を変えれば、どこにもない、誰も見たことがない表情の自然に出合うことができる。これからも庄内で、そういう自然の姿をたくさん撮っていきたいですね」。〝肉眼を越える写真〟を目指す高橋さんの写真家人生は、これからも続きます。

取材・文＝工藤拓也

（上）鳥海山の麓に流れ出た湧き水の沢、牛渡川にて。水底の藻や周囲の木々の緑、青空などが映り込んでいる。［水面シリーズ］（左下）朝日の大網の柿の木。奥から車のヘッドライトで、手前から懐中電灯で照らしながら撮影。［ライトアップシリーズ］（右下）温海暮坪の棚田。杭がけの稲とその影が整然と並ぶ様子が幾何学的で美しい。

八尾坂 弘喜さん

庄内の晩秋に現れる幻想世界

いかに無駄なものを省いていくか。それが風景写真の原点だと思います。

昭和26年、北海道生まれ、秋田経済大学卒業、東京綜合写真専門学校研究科中退。昭和59年、鶴岡に「写真工芸やおさか」設立。広告写真家として活動中。

短い夏が終わり、冬に向かって急速に季節が移り変わる庄内の秋。八尾坂弘喜さんが撮る秋の写真には、季節的な暗さの中に、力強さと幻想的な美しさが映し出されています。「僕の場合は、待つのが嫌いで、おっと思う景色と出合ったらパッと撮っちゃう。ただ構図は意識しています。無駄なものを省きながら撮りたいポイントをいかに狙えるか。それは訓練とその人の持っている感性でしょうね」。

北海道生まれの八尾坂さんが写真を始めたのは秋田での学生時代。卒業後は東京、秋田と場所を変えつつ、昭和59年に両親の生まれ故郷である鶴岡でフリーカメラマンの活動を始めました。「最初の頃は知り合いもいないし仕事もなかったので、風景写真をよく撮っていました。それが目に止まって市勢要覧などの撮影を頼まれるようになっていきましたね」。

平成15年には、地元郷土史家・堀司朗さんの依頼で撮った風景写真を「文学のある風景」として発表。庄内ゆかりの作家50人の小説と風景をシンクロさせた写真は地域内外で話題となりました。さらに平成17年に刊行された『藤沢周平心の風景』（新潮社）では、著者の一人として誌面の写真をすべて担当。平成22年に開館した藤沢周平記念館でも展示用の写真を一任されました。「今も藤沢文学の仕事を依頼されたりしますが、僕自身は写真を撮る時、特に小説を意識することはないです。風景写真はその風景に身を任せて撮る感じなので。ただ、藤沢先生の生家と僕の家が近いこともあって、自然と藤沢先生の心の風景に近いものが撮れているのかもしれないです」。素朴で慎ましい中にもにじみ出る、凛々しさと力強さ。それが二人の眼差しから現れる、庄内の原風景なのかもしれません。

最近はもっぱら料理写真などが多く、風景写真を撮ることが減ったという八尾坂さん。庄内一押しの風景を聞いてみました。「庄内はやはり海です。春はパステル調の空気が漂っていて、点景に漁師の磯見船。夏は透明感のある独特の深い青が広がって、秋はいかにもクロダイがいそうな波が打ち寄せる。冬は鉛色に濁った海に雪が降って。最近は秋が短いとよくいわれるけど、庄内の海にはきちんと四季があると思いますよ」。

（上）朝霧が立ち込める晩秋の庄内平野と月山。庄内地方の霧は日の出と共に消えていくことが多い。
（左下）夕方に立ち寄った米子漁港で偶然捉えた一枚。厚い雲から天使のはしごが粟島を照らす。
（右下）由良海岸の護岸堤にて。岩に打ち寄せる波の姿がこれから訪れる冬の厳しさを思わせる。

渡辺 幸任さん

山と人との結を次の世代へ

山小屋の話、山菜取りの指南、山を教えてくれる人がいる環境の中で、月山と向き合ってきました。

昭和24年、熊本県生まれ。同53年より鶴岡市在住、鍼灸師。平成6年より荘内日報に連載。著書に『出羽三山絵日記』、『出羽三山信仰と月山筍』がある。庄内民俗学会会員。はぐろ山岳捜索隊員。

「23年前、羽黒町の手向で、昭和初期の月山6合目『平清水小屋』の白黒写真を目にしました。初めて見るワラの小屋にくぎ付けになりましたね。あれは運命的な出会いでした」。以来、渡辺幸任（ゆきと）さんはこの掛け小屋について1冊の本にまとめようと、地域の人たちに聞き書きを開始。取材を続けるうち、人から人へと関わりが生まれ、キノコや山菜採りを教えてくれる師と出会い、山の深くへ入り込むようになりました。取材記録はいつしか膨大になり、地元新聞に連載を持つ機会に恵まれます。その集大成が平成18年に刊行した『出羽三山絵日記』です。

ページをめくると詳細な取材による記事がつづられ、山を熟知した印象を受けますが、渡辺さんは否定します。「私みたいに途中から山を覚えても地元の人にはかないません。本質的な山のセンスというんでしょうかね」。そう話す様子は謙虚さというより、深く地域にお世話になってきた恩の言葉に聞こえます。そんな渡辺さんの信条は「山の恩恵は山の人々へ」。「採った山菜やキノコは山小屋や宿坊に置いています。山のものを生活の糧にしている人たちがいますから。よその人を簡単に連れても行けません。そうしたルールを守ってきましたから地元の山菜組合に入ることができました」。ゼンマイを採ったら、上手に干してくれる人にすべて預け、半分ずつ恵みを共有する。渡辺さんは山と人との関わりの中で、物心両面での豊かさを分かち合ってきました。

渡辺さんの山行きは単独行動がほとんど。「山に向かう日は『山に行くんだ！』って朝から自分を駆り立てます。気が張っていないと危ないし、山のものも採れないし。半分ケモノになって行くような感覚です」。そう話す背景には長年、遭難者の捜索隊として活動してきた責務もあります。「捜索隊もこの春に世代交代して、我々年配組は相談役になりました。今、若手たちと一緒に捜索打ち切りの遭難者を探したり、山奥の採り場に連れて行ったりして、山中の地形を覚えてもらうようにしています」。自身が受けた恩と経験を、地元へ還元していく。その姿勢が山暮らしの内側にある大切なものを、次の世代へとつないでいくのかもしれません。

取材・文＝田口比呂貴
編集＝Cradle編集部

（右上）神秘的な色合いをみせる5合目竜ヶ池。（右中）笹やぶの倒木に群生するナラタケ。（左上）立枯にブナハリタケが白い花となって咲き乱れていた。（右下）沢の倒木に群生するブナハリタケ。（中下）昭和37年まで参詣者が往来した6合目旧参道と平清水小屋跡。（左下）苔むした倒木にかたまりとなったナメコ。写真はすべて月山山中。

まゆときぬの鶴岡産シルクのマスク

石油を原料として作られる
化学繊維の衣服が溢れる世の中
シルク産業の全工程が残る国内唯一の地域で
またひとつ新しい動きが生まれました

高級品で手入れが難しいからと、現代の暮らしから敬遠されがちなシルク。だが、実はシルクは吸湿性、保温性、放湿性、耐熱性に優れ、冬暖かく夏さわやか、触れているだけで肌を清潔に保ち、美肌効果やターンオーバー効果、デトックス効果、さらにはアトピーなどにも良く、紫外線からも肌を守ってくれる、スーパー天然素材だという。この特徴を最大限に活かしたマスクを作っているのが、「まゆときぬ」の小野寺志保さんだ。

使用するのは鶴岡シルク株式会社の庄内産シルク生地。このシルクを肌に触れる内側に使い、外側をリネンや木綿などで覆っている。主に就寝時などのノーメーク用だが、なんとこのマスクを使用したらほうれい線や毛穴の黒ずみが目立たなくなったという。他にもデリケートな部分にこそシルクをと、ふんどしパンツや生理用ナプキンを製作。使用者からは血行がよくなる、生理痛が軽くなるなどの声が上がっている。

さらに小野寺さんは、希少な上に先細りになっている国産シルクを未来に繋げたいと、養蚕業にも着手。ハーブ研究所スパールの山澤清さんと、日本産種の蚕で、皇室でも飼育されている小石丸の復活に向けたプロジェクトを始動した。今はまだ桑園づくりの段階だが、その畑で無農薬栽培した桑の葉で、お茶の葉販売も始めている。

もともと環境問題に関心が高く、お子さんのアトピーをきっかけにシルクに着目したという小野寺さん。少量でも農薬が周囲にあると生きられない蚕と、その小さな蚕から生まれるピュアなシルクで、人と環境を思うものづくりを進めている。

まゆときぬのマスクと、桑の葉茶は庄内町新産業館造館クラッセにて販売中。ふんどしパンツと生理用ナプキンの4点セットは注文を受けてからの製作となります。他にも注文に応じて赤ちゃん用のシルク肌着なども製作。気になる方はFacebook「まゆときぬ」をチェック。

まゆときぬ●mayu2kinu@gmail.com
出羽庄内地域デザイン 0235-64-0888

庄内俳句紀行

秋水の城下町まつやま、總光寺を歩く

季語
秋水（しゅうすい）
秋になると池の水が澄み水面に映る景色もひときわ美しい。

總光寺山門

庄内平野の稲刈りも終盤に近づくと刈られたばかりの稲株から若葉色の穭（ひつじ）が顔を出す。まもなく訪れる墨色の季節の直前まで、この穭田に命が吹きこまれる。今年もシベリアから白鳥の第一陣がやってきた。

海鳴りもすでに日を経し穭（ひつじ）かな

―本多静江

国道３４５号を最上川沿いに酒田へ向かうと、右手に「眺海の森」の案内が目に入る。その道なりに進むと松山歴史公園が現れ、松山城大手門が出迎える。松山藩の始まりは、信州松代より庄内入部した酒井忠勝の三男忠恒が、わずか17戸の寒村に中山陣所を開き、中山の地名を松山に改めたことによる。松山藩三代藩主忠休が安永８（１７７９）年に松山城の築城を認められ、大手門には「鯱（しゃち）」を上げることを許された。

歴史公園内には大手門の他に「松山文化伝承館」、茶室「翠松庵」、能舞台を備えた「松山城趾館」がある。かつての堀をしのばせる泉水には、堂々たる大手門が映し出されていた。行合（ゆきあい）の空と白い塀壁が、爽やかに揺れる七竈を喜ばせているようだった。

松山城大手門

曼珠沙華

總光寺庭園

色変へぬ松青々と能舞台

―あべ小萩

歴史公園からさらに眺海の森へ進むと、洞瀧山總光寺（とうろうざんそうこうじ）の山門が出迎える。参道の両側には、樹齢３８０年を超えるキノコスギが、まるで背比べをしているように２００メートルほど並ぶ（昭和31年、山形県の天然記念物に指定）。

参道の脇に重なる棚田の畦には曼珠沙華が咲き、コンバインの赤が里山の秋に活気を加えていた。対の秋茜が稲刈りの音と共に遊んでいた。

唐突といふこと曼珠沙華のこと

―松島あきら

眺海の森からの眺め

總光寺は６００余年前に創建された曹洞宗の名刹で、本尊は薬師如来、東方瑠璃光世界の本尊とされ、薬師瑠璃光如来とも呼ばれる。本堂、庫裡（くり）は、２００余年前の建築との伝えがあり、欄間には兎や寅などの動物や葡萄などの美しい彫刻が施され、荘厳な建築に柔らかな趣を添えている。庭の鯉のはねる水音につられて、龍の彫刻さえも動きそうである。庭園「蓬莱園」は、江戸時代に体系化された「築山泉庭」で、国指定名勝となっている。これから秋が深くなるに連れ、錦秋を彩る。

落合ひて山水澄みをたがへざる

―上田五千石

奥の院「峰の薬師」のある眺海の森の山懐深くまで登ってみる。西方極楽浄土に向かって立つ院は、庄内の人々の無病息災を願って瑠璃光を注いでいるという。

最上川と庄内平野を一望するこの場に立つと、西に日本海、北に鳥海山、東に月山に囲まれたこの桃源郷のようなところに、どこか懐かしいふるさとのすべてがあると実感する。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）